

『星解』に見る 1770 年のオーロラ

岩橋清美（国文学研究資料館）

はじめに

本報告は、1770（明和 7）年に寿量庵秀尹が著した『星解』をもとに、江戸時代の知識人層が「オーロラ」（＝赤気）をどのように認識していたかを論じるものである。1770 年 9 月 17 日（明和 7 年 7 月 28 日）に日本の各地で各地でオーロラが観測されたことは既に知られているところであり、大崎正次氏・渡辺美和氏らによって多くの関連史料が明らかにされている。（1）また、近年では、この時のオーロラの広がりや明るさに関する科学的な分析も行われている。（2）

筆者も歴史学の視点から、『星解』をはじめ、高力種信『猿猴庵随観図絵』、東海道原宿で書役を勤めていた土屋家に伝来した絵画史料をもとに、自然現象に対する認識は所属する社会的階層の知識形成と地域性に密接に関わることを明らかにした。（3）

本稿の分析対象である『星解』は 1770 年に成立した天文書で、特に末尾に描かれたオーロラの絵は歴史的オーロラ研究では頻繁に引用されている。現在、1770 年オーロラを象徴する史料といっても過言ではないであろう。管見の限りでは『星解』には 3 点の写本が存在するが、これまでの研究では『星解』のオーロラの絵を引用する際、なぜ、その写本を用いたのかについては、必ずしも明確にされていない。歴史学の視点からみると、写本の伝来などの書誌的な分析が考慮されず引用されることが少なくなかったと言える。そこで、本報告では 3 点の写本の伝来状況を明らかにした上で、そもそも『星解』とはどのような史料であるのか、作者である寿量庵秀尹がどのようにオーロラを認識していたのかを述べ、今後の研究の基盤としたい。

1 写本の伝来

管見の限りでは、『星解』には 3 点の写本が存在する。まず、それぞれの写本の伝来状況を述べてみたい。

（1）東北大学附属図書館所蔵本

東北大学附属図書館所蔵本（以下、東北大本と略す。）は、和装本で 33 丁からなり、外題には「星解 全」、内題には「星解」とある。表紙裏に東北大学図書館蔵書印、一丁めに狩野享吉旧蔵本である旨を記した蔵書印がある。末尾には「安政五戊午年霜月下旬写 河合蔵書」とあり、本史料が河合という人物によって、1859 年（安政 5）に書写されたことがわかる。河合の人物像は不明である。「明和六年七月現長星」の土御門家考図・幸徳井家考図は朱書き、オーロラの絵は赤気の部分が朱色で彩色されている。「天文祥異星類図解」の星図は一部が朱書きで表現されている。

「彗星客星本朝古今出現評註」の部分には朱書きによる書き入れ・訂正があるが、これは後述する松阪市役所所蔵本とも一致するため、両写本の原本に朱書きによる訂正があったと推測される。

本史料が写し取られた 1859 年（安政 5）は、7 月から 8 月にかけて各地でドナチ彗星が観測されている。10 月下旬には「紫の星」が、11 月下旬には「空に人形の星」が見えたという記録も残されている。ペリー来航後の混乱した世上を反映してか、「紫の星」を見

た人間はたちどころに死亡するなどといった噂も流れていた。本史料は、ドチナ彗星の出現を契機に作成された写本と言える。

（２）神宮文庫所蔵本

伊勢神宮文庫所蔵本（以下、神宮本と略す。）は和装本で、丁数は24丁である。外題・内題ともに「星解」と記されている。1丁めに神宮文庫の印と旧所蔵者を示す「氏命」の印がある。なお、「氏命」の印は裏表紙にも捺されている。本史料では星図・オーロラの絵はともに墨線のみで描かれている。東北大本と比較すると、彗星の尾を短く描いている点に特徴があり、「天文祥異星類図解」の部分の星図の一部には相異も見られる。

末尾には「村井敬義所持する処の原本散逸してあらず、則先考伝写するの一冊を寄贈すること然り 于時明治四十一年中秋 荒木田氏」とある。これによれば、そもそも伊勢神宮に所蔵されていた『星解』は村井古巖（敬義）が伊勢神宮林崎文庫に奉納したものであったが、それが散逸してしまったため、荒木田家が所蔵していた写本を1908年（明治41）に伊勢神宮に奉納したという。荒木田家は伊勢神宮の社家である。最初に伊勢神宮に蔵書を奉納した村井古巖とは国学者・蔵書家であり、京都で書籍商を営んでいた人物である。

神宮本が他の写本と大きく異なるのは、奥書きによって史料の伝来状況が明確できる点である。それによれば、1783年（天明3）、伊勢御師佐藤吉太夫が林崎文庫にあった村井古巖の献納本を写し取り、その後、1861年（文久元）に荒木田家が佐藤家の写本を写した。奥書に「文久元辛酉年夏当北方彗星出現、光芒余丈、依之講借佐藤氏蔵本写之且校合了」とあることから、写本作成の背景には、同年5月から6月にかけて見えたデパット彗星の影響があったことが推測できる。なお、佐藤吉太夫が写本を作成した1783年にはピコット周期彗星が観測されている。つまり、伊勢神宮の周辺では彗星が出現するたびに、『星解』の写本が作成され、社家や御師の間では一定程度、共有化されていたのである。

（３）松阪市役所所蔵本

松阪市役所所蔵本（以下、松阪市本と略す。）は和装本で、丁数は30丁、書写年代は不明である。史料中の「明和六年七月現長星」の土御門家考図・幸徳井家考図は朱書き、オーロラについては赤気の部分のみ朱色で描かれている。「天文祥異星類図解」の部分の星図は神宮本と同様にすべて墨線のみで表現されている。1丁めにある「林崎文庫」の印は、この写本がそもそも伊勢神宮林崎文庫に所蔵されていたことを示している。松阪市本の旧蔵者は、松阪市内で病院を経営していた久留春三氏（1876～1930）である。春三氏は医業のかたわら文化人としても活動し、漢学や書画に造詣が深く、書画・骨董などの収集家としても知られる人物である。そのコレクションは雨龍閣文庫と称されていた。『星解』も雨龍閣文庫の一冊で平成17年（2005）に同市に寄贈された。

同史料には1925年（大正14）の古書商の正札が挟み込まれていることから、久留家の購入時期は大正14年以降である。本史料の末尾には、伝来を記した古書商の印があり、その印文には「天明四年甲辰八月吉旦奉納皇太神宮林崎文庫以期不朽 京都勤思堂村井古巖敬義拜」とある。天明4年奉納とあるのは、神宮本の奥書と矛盾しており、天明3年の間違いである。松阪市本には、奥書はなく、伝来状況は不明である。1925年頃、松阪の古書店で販売されていた際には村井古敬旧蔵本・旧林崎文庫として認識されていたと思われる。神宮本が松阪市本の写本であることを示す証拠として1770年オーロラについて記した

「空中赤色之辨」の冒頭部分が「七月廿日」と書かれている点があげられる。正確には松阪本には「七月廿日」とあり、廿と日の間に1字分の空白があるのだが、神宮本ではこの空白が詰められて「七月廿日」とある。つまり、松阪本の書写人は、何らかの理由で日付を特定できず、それを空白で表現したが、神宮本作成時には、この空白の意味が伝わらなかったのであろう。これに比して東北大本には「七月廿八日」と明記されている。

3点の写本の比較から、『星解』には東北大本と神宮本・松阪市本の二つの系統の写本が存在していたと考えられる。なお、3点を比較すると、漢字の読み仮名に若干の相異がある。これは書写の段階で、書写人の判断で加除がなされたと考えられ、『星解』の読み方を示していよう。

2 内容構成について

つぎに、『星解』の内容構成について述べておきたい。まず、史料冒頭にある目次をあげておく。

明和六年

現長星諸家考図

同諸家勘文

元和二年見

彗星辨 彗字註 彗星六図 同四図 妖星六図

天文祥異星類図辨

彗星客星本朝古今出現評註並紀年

明和七年

客星之勘並星入月中事 月星運行道弁

明和七年七月廿八日

紅氣弥北天正見図

同紀年

空中赤色之弁

『星解』の内容構成を概観すると、①1769年(明和6)の彗星の考図と勘文、②彗星・妖星の図と占い、③彗星の歴史、④1770年の赤気の絵図、⑤赤気の歴史、⑥明和七年夏の客星、⑦赤気の考察となる。①は1769年9月上・中旬に日本各地で見られたメシエ彗星に関する陰陽頭の土御門泰福と配下の幸徳井家の考図と勘文であり、泰福は『晋書』・『漢書』をもとに「天下大水」の兆しと占った。朝廷では泰福の勘文に従って、8月11日に臨時の御神楽を執行した。その後、彗星は現れなくなったが、9月になって再出現した。この再出現が泰福の予見通りだったことや洪水など凶事が重なったことで朝廷内部では彗星は凶兆と認識されることになった。(4) 彗星の占いや過去の彗星出現の歴史に関する記述はこうした社会不安の現れであろう。『星解』は1769年に完成したが、1770年に客星・赤気が出現したことから「明和七年客星之勘並星入月中事 月星運行道弁」、「明和七年七月廿八日紅氣弥北天正見図・同紀年空中赤色之弁」が書き足された。内容構成から分かるように、『星解』は基本的には1769年の彗星の記録であり、オーロラは追加部分である。土御門家や幸徳井家の考図や勘文が掲載されていることから、秀尹は公家社会との繋がりと持つ人物であったと推測される。

3 秀尹のオーロラ認識

次に秀尹がオーロラをどのように認識していたのかについて述べてみたい。秀尹は1770年9月17日のオーロラについて以下のように記している。

(1) オーロラの発生と経過

【史料1】(5)

七月廿八日夜、北方隔山左右一面空中赤色也、見人正是大火也、於山北雖在大布施八升等之村々又久多庄五村人家不多、恐是若州一国大火而模於空見此矣、倩按若州一国無一度於可燒様、但若州城下者小濱也、民多、雖然一度可為燒亡哉、必可有次第遲速、殊小濱者隔路十有七里也、何於京都不可見、是正土中之水登於空受日光模而成赤色空中一面如然、譬如遠村之出火雖不見火本模於雲遙見、日輪者隱地球而雖不見、光者模水氣輝於空于見之如大火、日已在北順夜更可東回謂竟去矣、到丑刻見之東北間尚盛也、赤色中有同色之筋、譬如日没之前浮雲覆空隱日、日光從雲間洩光、則顯光筋、水氣之中厚薄有不同、依之從所日光指登而見如柱立、曾非怪事、至於曉尚回於東、至曙赤光減、是全雨氣之所為也、雖然晴天相續不發雨、併到今月度々之夕立、正其所為歟、宝永年中又享保年間在之、曾不及論善惡吉凶而已

【史料1】によれば、1770年9月17日(明和7年7月28日)の夜、北方の空が一面赤くなり、大火が起きたようだったとある。火事は大布施(現京都市左京区花脊大布施町)や八柘(現京都市左京区花脊八柘町)付近に見えたが、当該地域は民家が少ないため、若狭国が火元ではないかとある。9月18日午前2時頃、東北の空はますます赤気が増し、赤気のなかに同色の赤気が見えたという。

(2) オーロラ発生の原因

秀尹はオーロラ発生の原因についても考察を試みている。1770年は全国的に旱魃に見舞われており、6月頃から各地で雨乞いが行われていた。7月に入ってからしばしば夕立があったが、秀尹はこれをオーロラの影響と考えていた。さらに類似の現象が宝永期・享保期にもあったことをあげ、吉凶を論じるには値しないとも述べている。類似の現象とは1635年7月26日(寛永12年9月7日)、1730年2月15日(享保14年12月28日)のオーロラである。史料中の「宝永中」は「寛永中」の誤りである。

旱魃とオーロラの因果関係を論じているのは秀尹だけではない。陰陽頭の土御門泰福もオーロラの発生が旱魃と関わりがあると考えていた。泰福はオーロラ発生後に朝廷に勘文を提出し、旧占に基づき、赤気は兵乱や風災・火災あるいは地震の発生を予兆であると解釈した。しかし、勘文提出後、泰福は武家伝奏広橋兼胤に内密に面会し、赤気は旱魃によるもので、先人の説を否定するのは恐れ多いため、勘文には従来通りの事柄を記したと述べた。泰福自身は赤気を兵乱の兆しと理解するのは時流にそぐわないとも考えていた。また、オーロラ発生後に降雨があったため、民衆のなかにもオーロラが雨の予兆だと考える者が少なからず存在した。その意味で、秀尹の認識は当時の社会、とくに知識人層に共通するものであったと言える。

(3) オーロラの絵が表現しようとしたもの

『星解』のオーロラの絵は赤気が山から放射線状に吹き出すように描かれており、見る者に非常に強いインパクトを与える。3点の写本の絵を比較すると、山の形や赤気の表

現はかなり異なる。神宮本は松阪市本の写本であるが、絵の表現は異なっており、書写人の感覚によるところが大きいと思われる。この3点の絵と「空中赤色之弁」を比較すると、松阪市本の絵との共通性に気づく。「空中赤色之弁」の中の「赤色中有同色之筋」という表現を的確に表現しているのは松阪市本のみである。さらに、このときの「赤気」の様子について、勝部青魚の『剪燈水筆』に「山の向こうは黒し、山よりこの方は赤し」という記述があるが、オーロラに黒く見える部分があったことは、松阪市本の絵とも一致する。この点から松阪市本の絵が最もオーロラの姿を的確に捉えていると言えよう。絵自体は、赤気をもっとも盛んになった9月18日午前2時頃の状態を描いていると推測できる。また、オーロラの光を表現する赤色が松阪市本と東北大本では異なり、松阪市本では、黒みがかかった赤色で赤い光が拡散していく状況が緻密に表現されている。

おわりに

以上、雑駁ではあるが、『星解』の写本の伝来状況と内容の特色について述べてきた。現在、写本は3本伝来し、その系統は東北大本と松阪市本・神宮本の2系統となる。もっとも伝来過程が明確であるのは神宮本である。「空中赤色之弁」中の日付の記載の比較から明らかなように、記述内容が正確であるのは東北大本である。しかし、絵については、松阪本が「赤気」の状況を最も的確に表現している。

また、秀尹のオーロラ認識は当時の知識人層に共通する考え方であり、その色の不気味さに驚いてはいるが、それを凶事に直結させる考えは持っていなかった。この点が民衆層の意識と異なるところであり、18世紀半ばの「知」の有様を反映している。

註

(1)大崎正次『近世日本天文史料』（原書房、1994年）、渡邊美和『続近世天文史料』（暫定版）（私家版、2007年）

(2)Ebihara, Y., H. Hayakawa, K. Iwahashi, H. Tamazawa, A. D. Kawamura, H. Isobe, Possible cause of extremely bright aurora witnessed in East Asia on 17 September 1770, *Space Weather*, doi:10.1002/2017SW001693, 2017.

Hayakawa, H., K. Iwahashi, Y. Ebihara, H. Tamazawa, K. Shibata, D. J. Knipp, A. D. Kawamura, K. Hattori, K. Mase, I. Nakanishi, H. Isobe, Long-Lasting extreme magnetic storm activities in 1770 Found in Historical Documents, *Astrophysical Journal Letters*, doi:10.2847/2041-8213/aa9661, 2017

Kataoka, R., K. Iwahashi, Inclined Zenith aurora over Kyoto on 17 September 1770: Graphical evidence of extreme magnetic storm, *Space Weather*, doi:10.1002/2017SW001690.

(3)拙稿「絵画史料にみる近世人のオーロラ認識」（法政大学『多摩論集』第43号、2018年）。

(4)杉岳志「近世中後期の陰陽頭・朝廷と彗星」（高埜利彦他編 近世の宗教と社会二『国家権力と宗教』（吉川弘文館、2009年））。

(5)『星解』（東北大学附属図書館所蔵）。

*本報告は国文学研究資料館日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画の成果の一部である。